

氏名(本籍)	さいとうみずほ (岩手県)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博甲第4522号		
学位授与年月日	平成20年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	東北北部における弥生土器の研究		
主査	筑波大学教授	文学博士	川西宏幸
副査	筑波大学教授	博士(文学)	常木晃
副査	筑波大学教授	博士(文学)	浪川健治
副査	駒澤大学文学部教授	博士(文学)	設楽博己

### 論文の内容の要旨

本論文は、主として水稲耕作に依拠した日本列島西・南部と、狩猟採集に立脚した北方との疆域に位置していた東北北部の弥生時代をとりあげ、土器によってその時代像を描き出そうとしたものである。

第1章「問題の所在と研究の目的」では、東北北部の弥生時代像に関する先行研究を整理し、水田址の発見が決定的な証拠となって水稲耕作文化域、つまり弥生文化圏に入っていたとみる説が有力視されるに至った経緯を辿る。そこで、この説に検討を加える手だてとして、人間活動の存否をもっともよく物語る土器に着目し、土器をして活動の実態を語らしめる戦略を採り、研究目的として3段階を設ける。すなわち、第1段階として、既存の土器編年を精密にして考古学上の時間軸を確定すること、第2段階として、組みたてた編年に基づいて土器様式相互の影響関係を空間的に復原すること、第3段階として、時間・空間に表出した諸現象の意味を問うことである。

そこで、弥生時代前・中・後期の土器をそれぞれ第2～第4章としてとりあげて、第1・第2段階の目的にそって論述を進め、第5章を第3段階の目的にあてるという構成を本論文は採用する。

第2章「遠賀川系土器の変容と拡散」では、西方からの伝播をまって成立したという前期の遠賀川系土器の内容を検討し、甕3種、壺8種に分けて縄文時代最終末の大洞A'式から弥生時代中期中葉までの変化の過程を辿る。その結果、同系土器の変化として、第1次波及、第2次波及、解体という3段階が設定されるとする。第1次波及とは、現在の青森県八戸市域及びその周辺にあたる馬淵・新井田川流域でまず最初に同系土器が成立し、ここから第2次波及として、奥羽山脈を越え東北北部の各地へ拡散する。そして受容した各地で同系土器の在地化が進行し、解体期中期へ継続したことを示す。

第3章「所謂田舎館式土器とその前後」では、既存の田舎館式の存在を否定し、中期の在地化によって表出した地域差を、東方は下北半島基部の小川原湖周辺の青森県上北郡六ヶ所村大石平遺跡、西方は津軽半島先端部の青森県東津軽郡外ヶ浜町宇鉄Ⅱ遺跡の出土土器によって代表させ、それぞれ小川原湖周辺系統、岩木川流域系統と呼んで分離する。そしてこれらの2系統は、北海道の続縄文土器様式である恵山式とともに、中期初頭の二枚橋式を母体として成立し、小川原湖周辺系統は北海道の、岩木川流域系統は本州側の二枚橋式の影響を容れて、それぞれに独自色を示しつつ、変化の軌道を同じくすると説く。つまり、海峡を挟んで

津軽海峡土器圏と呼ぶ共通性がみとめられるというのである。ところが、中期末に至ってこの共通性は消失の方向を辿り、こうして後期を迎えるという。

第4章「赤穴式土器の変遷と弥生土器の終末」では、土器の外面を飾る連弧文様に注目して、後期後半の赤穴式土器を検討の俎上にのせる。その検討に基づいて、津軽海峡土器圏の解体後、遅くとも後期の中頃までには、本州内陸で対向連弧文系列が、三陸海岸域で単方向連弧文系列が成立した。これらとならんで、下北・津軽半島の先端部など津軽海峡に面する北側の海岸寄りには、北海道で成立した後北C<sub>1</sub>式が出現したとみる。そして、対向連弧文によって特色づけられる赤穴式を4段階に細分し、その最終段階において、茨城県域東部の久慈・那珂川下流域で成立して分布を北方へ拡げていた十王台式の影響を容れて、外面を羽状縄文で飾るようになるとともに、北海道や本州北端海岸域に分布する後北式からも影響を受けて、その文様帯を採用すると説く。この北方からの影響は、赤穴式が終焉を迎えた後期終末に東北北部が後北式の分布域へ包摂されていく、先駆けであったと評価する。

第5章「弥生土器の変遷を促したもの」では、上記第1・第2の研究目的にそって究明した第2～第4章の成果を総括し、時間軸ならびに空間的影響関係を約言する。こうして準備を整えて第3の目的へと論を進め、まず遠賀川系土器の波及については、移住者が同系土器を携えて自由に東北北部に至ったとは考えられず、同地方内での技術伝播に積極的に関与し、各地の中核的な集落の間で築かれていたネットワークによって、東北北部に技術を伝播したとみる方が、資料の様態に即しているとする。また、中期の環津軽海峡土器圏の成立については、東北北部の東西と北海道南部との海上活動が活発化したことによるとみる。そうして、環津軽海峡土器圏が解体した後、東北北部は赤穴式を含む広義の「天王山式系」土器の分布域に入るので、これは東北中・南部との結びつきが濃密になったことを物語ると推測を重ねる。つまり、東北北部の人びとが関わりをもった方面が弥生前・中・後期で異なっており、前期では南方、中期では北方、後期では南方、そうして後北C<sub>2</sub>・D式の分布域に含まれる終末期には再び北方との関係が濃密になったことを、土器から導かれる仮説としてひとまず提示する。

次に、土器に依拠した仮説を検証するために、墓制、住居の構造、集落の消長、水田の継続性をとりあげて、土器の諸動向との相関関係の有無を問う。その結果、墓制については明確な時期的対応を見いだすことができないが、住居構造の推移については中期末葉の画期に、集落の消長については、中期初頭ならびに同末葉の両画期にそれぞれ対応することが知られる。したがって、土器にみられる転換点は、人間の移動を伴う社会環境の変動を物語っていると結論づけ、土器から導かれた動向がまさに人間の活動を表していることを、あらためて説示する。他方また水田の継続性については、東北北部で確認されている2例の水田址はいずれも、汎列島的に長駆の人間活動が隆盛の色をみせた時期にあたること、水田経営に継続性が乏しいことを指摘して、東北・北部における水稻耕作は一過性にとどまり定着度が低かったと説き、水田の存在が生産様式上の画期を示していないことを強調する。そうして、以上論じたところから、弥生時代の東北北部の地域性を導き、南北双方からのインパクトが交互に及んだという点で、東アジアに端を発する初期農耕文化と北アジアに連なる狩猟採集文化とがせめぎあうフロントであったと総括して論を結ぶ。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

以上、内容を概述した本論文は、じつに丹念に資料を観察して先行研究を俎上にのせ、構想を精緻に組みあげたオーソドックスな作品である。まず、構築した土器編年ならびに復原した影響関係の結果が学術上の大きな意義をそなえている点あげられる。東南北部と北海道との間に介在していた土器動向の空白が本論の成果によって埋められ、弥生土器の汎列島編年体系が完整に向かって大きく前進したことになるからである。ついで、土器の影響関係が、土器動向の域にとどまらず社会変動や人間活動をも表出している点を

立証したことは、土器という考古学上の素材が時代を語る地位を獲得した意味で、これもまた高く評価される。さらに、定説視されがちであった東北北部農耕社会説に痛打を与えてその後退を余儀なくせしめるところまで至ったことによって、東北北部における爾後の弥生時代研究は、本論の恩恵に浴し、この到達点を踏みこえて進められることになるはずである。その意味で、東北北部における弥生時代研究に多大な貢献をすることは疑いない。

しかしまた同時に問題も内包している。弥生時代を画するうえで欠かせない因子として水稻農耕の定着をあげ、その水稻農耕社会のもとで作られた土器を弥生土器とする既存の定説に則った点である。すなわち、東北北部における水稻農耕の定着を否定しつつ、他方で弥生時代や弥生土器という語を頻用している点が、自己矛盾にあたるからである。これはしかし、弥生時代や古墳時代という時代区分名を掲げて国民国家史の構築に寄与してきた日本考古学界にこそ向けられるべき刃である。したがって、この刃に曝されざるをえなかったことは、本論文の欠陥とまではいえず日本考古学の既存の体系に疑義を唱えるべきであろう。また、水稻に力点をおいて雑穀類の存否を軽んじた点も、水稻偏重の風が強い学界の通弊に責任の一端がある。

このような学界上の問題は将来の理想的な解決をまたなければならないが、この点にかりに配慮を加えなかったとしても、本論文が学術上寄与するところが多いことはすでに縷述した通りである。時間の新古をはかるものさしだけにとどまらず、社会動向を語らせうるところまで土器研究の地位を上昇させたことは、個別研究のあるべき姿として、先達の研究者には大きな刺激を、後進には勇気を与えるにちがいない。その意味でも本論文は高く評価される。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。